



Title	ホール・ランゲージを礎にした英語教育：EFL幼児への応用を中心に
Author(s)	松本，敬子
Citation	大阪大学，2010，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58293
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【4】			
氏 名	まつもと けいこ	松 本 敬 子	
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）		
学 位 記 番 号	第	2 4 1 3 4	号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 22 年 6 月 22 日		
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当		
	言語文化研究科言語文化学専攻		
学 位 論 文 名	ホール・ランゲージを礎にした英語教育－EFL幼児への応用を中心に－		
論 文 審 査 委 員	（主査）		
	教 授 成田 一		
	（副査）		
	教 授	日野 信行	准教授 小口 一郎

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、幼児期の英語学習に相応しい教授法としてホール・ランゲージ(Whole Language 以下WLとする)を採用した。WLは英語圏の母語教育としての経緯からその活用には、EFLの環境、さらに幼児期の特徴への配慮といった2つのバインドが存在する。よって本研究では、幼児期に相応しい教授法として取り上げたWLを日本のEFL幼児の土壌に合わせて変容させていく過程について検討することを目的とした。具体的には、2,3歳児への授業実践、幼稚園への観察調査、4,5歳児への授業実践の事例を検討し、WLに基づく言語学習活動に伴い観察された様々な変化を、関連する集合体全体を視野に入れて検討した。その上で、【1】幼児期に相応しい外国語教授法の在り方、【2】EFL幼児に対するWLに基づく英語学習活動の実践、の2点に寄与する知見を得ることを試みた。

第1章 序章

第1章では、幼児期の英語学習の考察を進めていく第一歩として、幼児期の特徴を考察した。幼児期の学習の特徴は、右脳優位の時期であるために全体的学習であり拡散的学習であった。次に幼児期の特徴に見あう教授法の検討を行った。検討にあたり、外国語教授法を言語学の立場から3分類し(構造理論、機能理論、インタラクシオン理論)(Richards J. & T. Rodgers 2001)、それらの言語理論の言語観を反映した教授法を3分類に基づいて検討した。その結果、インタラクシオン理論の言語観を反映した教授法としてWLを採用した。

第2章 本論文の理論的枠組み

第2章では、本論文の理論的基盤であるWLの視座を先行研究をもとに整理した。WLは構築主義の立場と軸を同じにし、多言語主義や多文化主義や多方言主義を保持し、言語の発達における多様性と自主性を求める運動として言語の違いの中で読み書き話す子どもたちの権利を指示し言語の学習を社会的コンテクストのなかの実践として捉えてきた言語文化的な差異に橋をかける教育実践である。WLには言語観、学習観、教師観、カリキュラム、コミュニティの5つの理念がある。言語観は、言語の学習は言語使用のコンテクストのなかで行われる。言語使用の目的と社会的関係によって規定される社会的な場の全体性において生成してくるものであると捉えている。こうすることで多様な文化的、社会的な背景をもつ子どもたちが言語使用のコンテクストのもとで有意義に言語を身につけることを可能としてきた。学習観は、個人的な創案と社会的な協約との均衡化を図りながら重層的な言語発達をなすことで 相互の関連が深化し双方が発達していくのであると捉えられている。教師観は、常に子どもの言語の発達を「言語発達」としてのみ抜き出してみせるのではなく、言語を子どもの経験や行動や精神の「発達の全体」のなかに置いて捉えようとしている。カリキュラムとコミュニティの理念に関しては4章以降の実践を

通して例証を試みた。

第3章 WLの学習環境と指導の特徴

第3章では、WLの特徴的な学習環境と指導についての考察を行った。学習環境を整備することは、子どもたちに学習に対する自覚を促すだけでなく自己の学習に責任を持たせるといった反省的思考の機会となる活動を与える場を整備することである。その環境の中で行われるWL指導の特徴的な3点を軸に考察した結果、それらの指導の共通項は第1に子どもたちが相互に言語を用いて活動を行っていること、第2に子どもたちは学習に対して責任を持つようになることであった。そしてこれらは子どもたちが学習材を手に取りやすくまた子どもたちが学習しやすい場となるようにWL教師が熟慮し構築したWL教室環境によりもたらされていた。さらにTESLの立場からのWL検討を試みた。ESLにおけるWLの主張は母語教育における主張と軸を重ねており、その根底には母語の獲得段階で保持している生活経験や既有知識を尊重すること、そして子どもの学習可能性の幅に限界を作らずに広いスタンスで指導を行うことであった。

第4章 EFL幼児へのWL英語学習実践Ⅰ

第4章はFreeman & Freeman(1992)をもとにEFL幼児向けにまとめ直した7点を根拠とし、EFLの幼児に対する教授法としてのWLの変容過程の端緒を検討した。具体的には2007年6月から2008年7月までのEFL幼児を対象としたWL英語学習を授業者としてアクション・リサーチを行い事例を検討した(C-1,C-2)。その結果、EFL環境下の幼児は、日常生活の中で英語に触れる機会が母語が英語の子どもたちと比べて圧倒的に少ないため、L1の子どもたちに対するWLの授業では強調されていない音声面からのインプットとして歌を組み込むなどEFL幼児への土壌へとWLを変容させる過程を明らかにした。またC-1学習のリフレクションの結果を受けてC-2学習が変容していった。最後にC学習全体のリフレクションを行い新たな変容の課題3点を出し次の学習へのニーズとして採用した。

第5章 幼稚園における言語学習環境調査

4章で出された課題に対して5章において、A幼稚園での観察調査(D)を行った。本章は松本(2009d)をもとに、言葉がつむぎ出される過程および文字に出会う過程そして幼児の自立の過程を環境全体を観察調査した。A幼稚園では、言葉の学習を単に言葉のみの学習と捉えるのではなく、あくまでも幼児の育ちの中の全体における言葉の育ちであると位置づけていた。

第6章 EFL幼児へのWL英語学習実践Ⅱ

第6章では、4章で出された課題およびA幼稚園での観察調査をもとに、EFL幼児に対する教授法としてのWLの変容過程の検討を深めた。具体的には2008年9月から2009年8月までのEFL幼児を対象としたWL英語学習を授業者としてアクション・リサーチを行い事例を検討した(E)。その結果、文字の導入にはWLで強調されている学習者の背景的知識や既有知識を用いる視点、絵本と文字の導入過程を融合した新たな学習活動の学習者側からの創出などの変容がみられた。またWLをEFL幼児の土壌に適合させる学習変容過程の検討は、学習過程の変容だけでなく、コミュニティとしての集合体の変容をももたらすことを示した。

第7章 結論

本研究の意義は、【1】幼児期に相応しい外国語教授法の在り方、【2】EFL幼児に対するWLに基づく英語学習活動の実践、の2点に寄与する知見を得たことである。異なる言語や異なる文化を尊重する精神や態度を育成することは人間形成の基礎を培う幼児期にこそ最も重要である。よって幼児期にこそ発達段階に応じた外国語教授法の検討が求められる。欧米における母語教育としてスタートしたWLをその理念を損なわず、日本におけるEFL幼児の学習に導入する変容の過程を継続的にアクション・リサーチの手法により調査を行った。授業者のリフレクションを取り入れ、多面的な視点で幼児に相応しい外国語学習へと変容させていくといった、循環的な改善の試みを繰り返すことによって、幼児に相応しい英語学習の在り方のモデル化が可能となっていくのである。本論文において、実践をいかに記述していくかについてはアクション・リサーチの記述方法を用いた。外国語教育におけるアクション・リサーチとは、指導上の問題点を特定し、問題の解決策を探ることを目的として、教師自らが行う調査・研究を意味する。現実の問題に対して、その問題に関わる当事者が現実行動として行うアクション・リ

サーチの価値は高い(佐野編2000)。最後に保護者の方々と共同体で子どもたちの学びを支えていく1つのモデルとして本論文が役立つことそして幼児期の英語学習への考察が1歩でも深まっていくことを切に願ってやまない。引用文献

佐野正之（編著）(2005)『はじめてのアクション・リサーチ』東京：大修館書店

松本敬子(2009d)「幼稚園における言語学習環境の一考察 - A幼稚園における観察事例より - 』『英語教育の新しい理論と実践』日野信行(編)、大阪大学大学院言語文化研究科、21-30.

Richards J. & T. Rodgers (2001) “Approaches and Methods in Language Teaching” Cambridge: Cambridge University Press.

論文審査の結果の要旨

本論文は、Whole Language (WL) の教育理念を日本の幼児英語教育に適用し、これを理論面および教育実践面の2つの観点から考察したものである。この教育理念は、言語学習を学習者の生活世界に有機的に関連づけ言語と学習を統合的に扱うが、そうした特徴から、これまでは主に多様なアクティビティが可能な母国語教育において活用されてきた。本論文は、WLの特徴を生かしながら、日本の幼児に対する英語学習活動 (EFL: English as a Foreign Language「外国語としての英語教育」) を4年間に亘って実践し、幼児の学習変容の動態を解明し、そのアクション・リサーチを通じて得られた知見に基づいて、幼児期に相応しい外国語教授法の在り方を提案している。

WLは教育理念や方針の大枠を示したものであり、具体的な教育方法がカリキュラム化されているわけではない。このため、このアプローチを的確に記述するのは必ずしも簡単ではない。しかし、本論文では特に第1章から第3章において、先行研究に留まらず、WLの実践サークルが作成した文書等、多様な資料を収集・検討する中で、教育理念、学習・発達観、教師の役割から具体的な教室環境のあり方を含め、多角的な視点からWLの定義を試みている。第4章から6章は、第3章までの議論から得られたWLの教育・学習観に基づき、シラバス開発、授業実践、そしてその分析を行い、いくつかの重要な教育的提言を行っている。

日本における幼児英語教育は、音声や話しことばを偏重する嫌いがあったが、本論文はWLの統合的な言語教育という理念を生かし、文字を含むより総合的な幼児英語教育の可能性を切り拓いている。また、言語学習を学習者の生活世界に有機的に関係づけ、そこから教室、家庭そして社会までも射程に含めた言語教育のコミュニティを形成する可能性を提示する。この点でWLの理念を教育実践に結実させていると言えるが、さらに、幼稚園の実地調査から得た日本の幼児教育環境についての知見を生かすことにより、(幼稚園教育と連続性を持つような) 日本独自のWL教育のあるべき姿を提言している。それも本論文の功績である。

ただし問題もある。教育実践の記述がやや断片的であり、そのため授業の具体的なあり方や背景事情が十分整理されて提示されていない。研究の背景となるべき、これまでの日本の幼児英語教育の教育方法、カリキュラム、教育成果などの調査が不徹底で、本研究の意義や達成度を客観的に評価するための基準が十分示されていない。アクション・リサーチという研究方法の特性からやむを得ない面はあるものの、研究のあり方や成果を、(WL理論の外側から見て) 客観的に評価するという観点が採り切れていない点が散見され、議論が未整理な箇所も見られた。

しかしながら、本論文はこれまで未踏の領域であったWLによる幼児への外国語としての英語教育を実践・検証し、幼児英語教育のあり方に新しい提言をし、このアプローチの可能性を広げたという意味で、オリジナリティと意義を有していると考えられる。

以上のように、審査委員会は、本論文が博士(言語文化学)の学位論文として価値のあるものと認める。